



## 書名が5回続く録音図書??

最近、いろんな館の録音図書を聞いていますが、録音の順序がいろいろあるのにびっくりしています。その中に、短編集でしたが、本文が始まるまでに、なんと書名が5回も出てくるのもありました。そのテープは次のように録音されていました。

※ △△△=書名

○○○<sup>1)</sup>著△△△(書名)、・・・、原本奥付、△△△、・・・、原本奥付終わり、△△△<sup>1)</sup>(目次の前ページに書名があった)、目次、(以下、短編の項目)□□□、●●●、◆◆◆、△△△、▲▲▲、目次おわり。△△△<sup>2)</sup>(本文始まるまえに再度書名があった。)、□□□、以下、本文・・・

音声訳者は原本通り読んでいるのですから、なんの疑問もいかなかったのでしょうか。墨字原本では本文に入る前や目次に入る前に書名が書いてありますが、録音図書の場合これらは省略しています。

(盲人情報文化センターでは、墨字原本に目次が無いような時に限り、原本奥付からいきなり本文に入るのではなく、書名を読むこともあります。)

今回は墨字原本には目次の前にも目次のあとにも書名が書いてある為、どちらも読んでありました。しかし、これでは、利用者は書名が何回もでてくるので混乱してしまいそうです。晴眼者は本の構成が見えていますから混乱はしません。本の構成がわからない視覚障害者は何回も書名を読まれるとまどってしまうことになるでしょう。こんな混乱をさけるために、録音図書では「録音の順序」を決めています。「録音の順序」では、こうした本では、△△△<sup>1)</sup> △△△<sup>2)</sup> は読まないのが普通です。

この本がデジター図書になれば、本文が始まるまでに6回聞かされることにもなり

ます。(デジ図書は挿入したら最初に書名を自動的に読み上げる為)

各館のテープを聞いて気になったことは、本のタイトルを読みはじめるまでに、長々と音楽が入っていたり、館の挨拶があったり、「どこどこの協力で作られた」などのコメントが入っていて、自分の借りた本の書名が出てくるまでに時間がかかるものがあります。利用者からすれば、本来、原本とは関係ないことが始まるまでになかなかと聞かされるわけです。

「録音の順序」では最初に著者名と書名を読むことにしていますが、それなりに意味があるわけです。原本奥付も最初に読むのは意味があります。原本奥付を本の通りに最後に録音すると、最近出版された本と思って聞いていた本が、実は10年まえに書かれた本であることが最後にわかるのでは困ります。私たちが本を読む時も、読む前にいつ頃出版されたかは原本奥付で確認して読むでしょう。利用者が最初に知りたくても、最後に録音されていたのではそれを探すのに時間がかかります。その為、録音図書では最初に読むようにしています。

しかし、最近、デジ図書は検索が便利だからと”原本の順序通り”に作るということもいわれています。しかし、デジ図書は検索が便利だからといってもわざわざ原本奥付を探して聞き、また元にもどって本文を聞くという作業になります。デジ図書では、必要でなかったら飛ばすことが簡単にできるのですから、利用者にとっては従来の「録音の順序」通りに録音してある方がはるかに便利です。

墨字の本は録音図書になることを前提に作られていません。墨字原本の形式にこだわるのではなく、いかに利用者が聞き易いかを考えていくことが大切なことではないかと思えます。

## 先月の例文の処理例

### 練習問題 1

#### 杖とは何ぞや

いったい杖とは何だろうか。

何であろうかという疑問符の記号はクエスチョンマーク「<sup>1</sup>？」

これは人が首をか上げて物を尋ねている姿からきているともいうが、この記号の下の方の”・”は地球、アトムで、その上の曲がったものは古代のlituusという錫杖しゃくじょうだという説もある。

未知の丸い地の球の上に問いを発する予兆占いに用いる杖が、威圧的につっ立って”いかにして””なぜ”と相手に永遠の対話をしている科学の紋章の符号だという。

このように疑問が杖で示されているように、杖とはわかっていそうで不可解なものであるが、『広辞苑』には、

①歩行の助けに携える細長い棒。転じて、たよりとするものたよ。②拷問や罪人を打つのに用いる棒。律令制では長さ三尺五寸、太さ三〜四寸のもの。③(丈とも書く) ジヨウハ、ツエノツクリ 古代の長さの単位。ほぼ一丈(約三メートル)に相当。弓一張りの長さや、中世の地積の単位。④梨の実のほぞ。などと出ている。

『大漢和辞典』には、

杖とはチャウ、チャウ。①歩行のたよりに執持する竹・木の棒。②つえつく。③もつ、とる。④よる、たよる。⑤むち、しもと。⑥五刑の一つ杖刑。⑦むちうつ、たたく。⑧柄。⑨丈 ツエノ、ツクリ、に通じる。杖 ニンベンニ、ツクリガ、ジヨウ は俗字であるが特に兵仗、儀仗の時杖 ニンベンノジヨウ にする。とあり、いずれの辞書でも大同小異である。

それでは杖という語源をさぐってみよう。

『日本国語大辞典』などを引くと、

ツキスエ(突馬・衝馬)、ツキサスノツキニ、ジュウキョノキラ、または、ショウトツノショウに、ジュウキョノキョ、の略[和訓栞・大言海など]、ツキ(衝馬)、ショウトツノショウ、ジュウキョノキョ、ツエの義[言元梯]、ツキエ(突枝) ツキサスノツキニ エダ、ツキエの略か[大言海]、ツクエダ(突枝) ツキサスノツキニ エダ、の義[和句解・日本釈名]。手と地とを連ねてツク枝の義[日本声母伝]。ツはツク(衝・突)の語幹、エは枝の転[日本古語大辞典他]、ツキノエ(小枝)、チイサイ、エダ、の義か[雅言考]。ツクウデ(突腕)の反[名語記]、ツキエル(衝殖)、ショウトツノショウ、ウエル、の義か[名言通]。

などとある。

どうやら細長い物を押し立ててささえとするという「突く、衝く」ツク(1回しか読まない)に関連してくるようだ。そして、ツクエダ、ツキエ、ツクエ、ツエと言っているうちに杖と机とは同じ語源から出てくるのではないかと私は思えてきた。このことはすぐには理解できないでしょうが、古代の机は現在でも伊勢の神宮で用いられている【木若】案という長い木の枝を結んで平面にした案という机である。

このことは恩師の小野祖教先生が「玉串と幣帛」(『禮典』一号)に「つくゑの前身はつける杖であったと思う。物を木の枝につけたから、その杖をつくえと呼んだ」と主張し、「つえの前身は、物を縛りつけて支えて置く長い棒、長い木の枝」だと記されていた。これをくわしく説明していると先に進まぬから、またあとで記すことにして、ひとまず杖も机も一つの語源から出て、杖のつも、机のつも附・着 カンジ、ツケタリノツキ、マタハ、オチツクノ、ツクに密接な関係があるうとし、突く枝 ツキサス、ツクエダが語源でなかろうかとしておこう。語源というものは古いものほどわからないものが多い。

杖の字源は『字統』や『字解』によれば、声符は丈 ツエノツクリ、丈は杖をもつ形で杖の初文。兵器として用いるもの杖 ニンベンニ、ジヨウという。木扇であるのは木製が多かったからであろうが、〇と・・・  
・パソコンに漢字がないので省略します・・・

### 処理のポイント

今回は、現在音訳している原本を取り上げてみました。あるチームが勉強会で取り上げていただきましたが、結論として「難しすぎる。音訳図書としては不向き!？」となったようです。グループでも勉強会で取り上げておられるでしょうが、今回の文

章はあまりに難しすぎたと反省しています。

さて、今回は文章では下線部分が引っかけるところ、網を掛けた部分が補足として考えた部分です。下線の1、5は取えて補足をいれなくてもわかるようです。それ以外はなんらかの補足をいれないと文章の意味がわかりません。

また、この文章では、「初文」(ショブン?、ショモン?)の読み方は辞書にもありません。初めの文字と解釈して「ショモン」としましたが、「漢字の処理」とともに「読み方」そのものもなかなか大変な本でした。

☆☆☆☆☆ 今月の練習問題 ☆☆☆☆☆

ワスプと『華麗なるギャッツビー』

ロスト・ジェネレーション(失われた世代)という呼称で、「何が失われたのか?」を問題にするのは的外れかもしれない。この呼称は、ガートルード・スタインがパリで自家用車を修理に出した修理工場の主人が役立たずの工員を、「近ごろの若いやつらはどいつもこいつもだめなやつばっかだ!」とののしった言葉を、スタインが勝手に大袈裟に仕立て直して、ヘミングウェイとその同世代作家に対して使ったものだからだ。

ホテルで断られる典型的場面は、映画『紳士協定』(一九四七)に見られる。これはグレゴリー・ペック扮するワスプの人気ルポライターが、ユダヤ系に化けて種々の差別を体験し、『私は六か月ユダヤ人だった』というルポに纏める形で反ユダヤ主義に挑戦する話だが、主人公は〈リストリクティッド(ユダヤ系の宿泊を拒否する)〉という噂のある一流ホテルに挑む。出迎えた非常に恰幅のいいマネジャーは、真に晴れやかな表情で「お客さまは“ヘブライ宗教”の方ですか?」などと、当時のPC言葉を使って対応する(PCとはポリティカリー・コレクトの頭文字で、「差別的意図のない」という意味)。主人公が次々と質問して相手を窮地に陥れ、「アザワイズ(どうしても泊まるといったら)?」と迫ると、マネジャーは表情を一変させ、「アザワイズ(どうしてもとおっしゃるなら)」と答えて、いきなりチーンとベルを鳴らし、くるりと背を向けて堂々たる歩調で自室へ引っ込む。すかさずボーイが、さっき運んできた主人公のスーツケースを抱えて玄関へ持って行ってしまふ。主人公の姿は本当に惨めにみえる。

〈紳士協定〉とは、マイノリティがあえて差別される状況に挑んでこないかぎり、ワスプ側はその存在を無視し、マイノリティも相互にあたかも差別が存在しないかのように振る舞うが、挑んでくれれば敢然と排除するワスプ側の姿勢を指す。これは公式に

は「分離すれども平等（セパリト・バット・イーコール）」という、事実上の差別方式と不可分の関係にあった。E・ディグビー・ボルツェルは前掲書『プロテスタント・エスタブリッシュメント』の中で、このユダヤ系に対する〈紳士協定〉をめぐる姿勢が、民主党と共和党のワスプを分ける分岐点の一つだったと書いている。つまり非公式かつ微妙な状況では、共和党ワスプは反ユダヤ主義に対して傍観者の態度をとり、クラブや職場からは断固彼らを追放するが、民主党ワスプはそうはしない。さらにこの紳士協定はホワイト・エスニックにも近年まで拡大されていた例として、ボルツェルはケネディが大統領選挙の前後、メディアにゴルフ場にいる自分を撮られないよう異様なまでに配慮した

### しゅつしよしんたい 出処進退

「出ル」と「処ル」、「進ム」と「退ク」。反義語の組み合わせからなる熟語。どこを出入りするかといえ、べつに歓楽街でもなければ刑務所でもない。中国のエリート階層（士大夫）が進む官途をさす。彼らにとって、君主に仕えて国政の運営にあずかることは、それまで身につけてきた知識や学問を役立たせる理想の場であった。

しかし、その理想の場がかならずしも理想の場でないことは、いまさら指摘するまでもないだろう。改革者、行動者として現実に立ちむかえば立ちむかうほど、大きな壁にぶつかることはよくある。「こんな乱れた世の中を正そうなどと、むきになることはない。いっそ世を捨てよう」と思う一方で、「いや、それでも手を引くことはできない」とつぶやき、進退両難のはざままで悩むのが人情の常である。

そこで、行動の準則とでもいうべきものが必要になってくる。あるとき、孔子は一番弟子の顔回（がんかい）にむかってこう言った。

——コレヲ用ウレバ行イ、コレヲ舎ツレバ蔵ル。唯、我ト爾トコレアルカナ。

（登用されれば力を発揮するが、認められぬときはじっと静観している。こういう境地にいられるのは、わたしとおまえぐらいのものだろうな）。出処進退が自由でいさぎよいことを「用舎行蔵」とか「用行舎蔵」とかいうのは、この話にもとづく。

「舎」は捨に同じ。

孔子は社会改革に積極的に立ちむかうことを自己の責務としていたが、その反面、世の中から隠遁する気持ちも強かった。あるときは、「道が行なわれぬときは隠れるべきだ」と言い、あるときは「道が行なわれぬ世の中だからこそ行動すべきだ」と言っていることから、彼がしばしば「仕」（出仕）と「隠」（隠棲）との間で揺れ動いていたことが見てとれる。彼は、行動の準則についてこうも言っている。

——篤ク信ジテ学ヲ好ミ、死ヲ守リテ道ヲ善クス。危邦ニハ入ラズ、乱邦ニハ居ラズ。天下道有レバ見ワレ、道無ケレバ隠ル。邦道有ルニ、貧シク且ツ賤シキハ、恥ナリ。邦道無キニ、富ミ且ツ貴キハ、恥ナリ。

（学問の大切さを信じて積極的にとりくみ、命がけで道の実現をはかる。危なっかしい国には足を踏み入れず、乱れた国にはとどまらない。道が行なわれている時代には

積極的に仕官するが、道が行なわれない時代には退き隠れる。国がきちんと治まっているときに、貧しく賤しい。国が乱れているときに、富貴を手に入れる。これはどちらも恥ずべきことである。政治家や財界人に、ぜひこのことばをかみしめてもらいたいものだ。

『言葉に関する問答集』より 文化庁編

問：「旅客機」は「リョカッキ」か「リョカクキ」か

答：この問題は、「現代かなづかい」による表記の問題と、語の発音意図と、実際の発音との三つの問題とがからみ合っているので、なかなか簡単には解明し難い問題である。

「旅客機」は、歴史的仮名遣いでは、必ず「りよかくき」と書くことになっていた。しかし、その発音は必ずしも「リョカクキ」ではない。「リョカッキ」であることもあり、「リョカクキ」であることもある。しかし、たとえ「リョカクキ」と書き表す場合であっても、その第二拍の「ク」、すなわち、[ku]の母音[u]は、はっきりとは響かないのが標準的な発音であるとされている。すなわち、「リョカクキ」という語を、ごくゆっくりと、一音一音、丁寧に、念を入れて発音した場合の「ク」は、「クルマ(車)」とか「ゴクラク(極楽)」とか言う場合の「ク」と同様に、はっきりと、その母音[u]が響いて発音される。ところが、一音ずつを区切ってでない、自然な発音では、「クルマ」などの「ク」は、はっきりと母音[u]が響くけれども、「リョカクキ」などの場合の「ク」は、[ku]の子音[k]は、明白に響いても、母音[u]は響かず、単に口構えだけで終わるのが普通である。もちろん、地方によって、そうならないところもあるが、少なくとも、東京語においては、こうなるのが普通である。これを母音の無声化という。

母音の無声化が更に進むと、ついには母音が全く脱落してしまい、「ク」の子音[k]が、その次の音「キ」(「機」の「き」、すなわち[ki])と緊密に結びついて発音される。この場合には、促音「ッ」となってしまう。これをローマ字で表してみると次のようである。

- (1) ryo ka ku ki  
↓
- (2) ryokakuki  
↓
- (3) ryokak(u)ki  
↓

(4) ryokak ki

(5) ryokakki

すなわち、「旅客機」は、(1)で示したように、音に分析すれば、「リョ」・「カ」・「ク」・「キ」の四音から成る語である。この語の発音意図としては、(2)のようであるが、標準的な発音では、ごく自然に発音した場合には、(3)のように母音[u]が響かず、単にその口構えだけの発音となる。その聞こえとしては(4)のようになるが、(4)で示した空白の部分は、常に必ずしもこのように明確でなく、しばしば(5)のように、つまり促音化して聞こえることもある。

「旅客機」は、「リョカッキ」か「リョカクキ」かの問題に似た問題は、ほかにもたくさんある。例えば、

- 悪感情=アッカジョウ・アクカンジョウ
- 逆効果=ギャッコウカ・ギャクコウカ
- 三角形=サンカクケイ・サンカクケイ
- 三色旗=サンショッキ・サンシヨクキ
- 水族館=スイゾッカシヨウ・スイゾクカン
- 声楽家=セイガッカ・セイガクカ
- 北極圏=ホッキョクケン・ホッキョクケン

など、すべて同じことである。

ところで、「学校」「即決」「百貨店」「目下」「躍起」などの語は、歴史的仮名遣いでは、「がくかう」「そくけつ」「ひやくくわてん」「もくか」「やくき」と書き表していたが、その発音は、その当時でも明らかにそれぞれ促音となり、「ク」の母音を無声化しての発音ではなかった。ところで、「現代かなづかい」は「大体、現代語音にもとづいて」書き表すことになっているので、前記の「学校・即決……」などはすべて「がっこう・そくけつ……」などと書くことになり、発音と表記とが一致しているのも問題には起こらない。ところが、「液化・激化」などでは、「えっか」と書くか「えきか」と書くか、「げっか」と書くか「げきか」と書くかなど、語によってはいわゆる「ゆれ」を生じているものもある。これは、結局、発音の問題であって、ここで問題にしている「旅客機」などの場合も同じで、結局はどちらの発音が、より一般的・標準

的であるかということである。

語の各構成要素が結合して一語を形づくる場合、初めの構成要素の末尾の音が〔キ〕・〔ク〕であり、その次に続く構成要素の第一音が力行音である場合は、その〔キ〕・〔ク〕と次に続く力行音との間にはさまれた母音〔イ〕・〔ウ〕は、その構成要素どうしの結合の緊密の度合いによって、原則として脱落するか無声化するのが普通である。脱落した場合は〔キ〕・〔ク〕は促音化する。例えば、「学校」は「ガク」+「コウ」であり、その結合は緊密であるから「ガク」の「ク」の母音〔ウ〕は脱落し、促音「ッ」として「ガッコウ」という発音になる。その語が、社会の各方面・各分野で、大人も子供もごく普通に使う言葉であればあるほど、その語の構成要素の結合は緊密になってくる。「液化」は、「学校」に比べて、比較的新しく使われるようになった言葉であり、使用分野も狭いので、「液」と「化」との結合が「学校」の場合ほど緊密ではない。そこで、その発音も、完全に促音化するまでに至っていないと見ることができるのである。すなわち、無声化の段階にあるのである。また、ときには、無声化しないで発音されることもあるほどである。

「旅客機」以下初めに掲げた、「悪感情・逆効果・三角形」などは、いずれも、語の校正要素の第二次結合の箇所が、促音化するか、無声化の段階にとどまっているかによって生ずる発音のゆれの問題、及び、それに伴って生ずる表記のゆれの問題である。

「旅客機」は、「旅+客」、すなわち、「旅客」が第一次結合によって生じた語で、その「旅客」に、「機」という構成要素が第二次に結合し、「旅客機」という語ができたものと考えるのが妥当である。この場合、もしも「旅+客機」とすれば、「客機」は「カクキ」ではなく「カッキ」となり、したがって、「旅客機」は、問題なく「リョカッキ」となるであろう。しかし、「旅+客機」と考えることは妥当でない。他の語も同様で、その第二次結合としては「悪感情」は「悪+感情」、「逆効果」は「逆+効果」、「水族館」は「水族+館」、「声楽家」は「声楽+家」などと見た方が妥当であろう。このようにして、この第二次結合の箇所は、いずれも初めの構成要素、あるいは、第一次結合の箇所は、いずれも初めの構成要素、あるいは、第一次結合をした語の末尾の音が〔ク〕であり、そのあとの初めに力行音を持つ構成要素、あるいは語が続いており、〔ク〕の母音〔ウ〕が無声化の段階にとどまっていると見ることができる。

〔キ〕〔ク〕を無声化して発音しても、一般の人々にとっては、無声化したかしないかは、意識外であることが普通であり、発音する者の内省によっても、聞き手にとっても、促音のように聞こえ、あるいは、〔キ〕・〔ク〕のように聞こえる。よしんば無声化をはっきりと意識しても、表記面に表す文字は仮名にはない。また、言葉によってその意識が違うこともある。そこで、そこで、促音ととれば「っ」で書き、促音でないのとれば、「き」なり

「く」なりで書くことになる。また、自然の発音では促音化しても、ゆっくりと丁寧に言ったり、改まって言ったりする場合には、促音化しない場合も、〔キ〕・〔ク〕である場合すらある。そして、これは、個人差・職業差・環境差によっても左右される場合が多い。いずれにしても、一般的にどちらでなければならぬと決めることは困難な問題である。

このことについて、国語審議会は、その第二部会の審議経過報告で「発音の「ゆれ」について」の審議検討の結果を次のように述べている。

## 2 「ク」音のあとに力行音が続く語例

### (1) 悪化……旅客機・緑化……

などは、だいたい、促音で発音されるのが普通であると認められるが、なかには、ときによって、促音でなく発音されるものもある。(中略)

以上、多くの語例について、現在行われている標準的とみられている発音をよりどころとして、その語の一般社会における使用の度合い・分野・改まった場合の発音か、自然な発音か、口頭語的か文章語的かなど、いろいろな観点から検討を加え、総合的に判断した結果、いちおう上記のように分類したものである。

(以上、第五十七回国語審議会総会(昭和40・12)に対する各部会の審議経過報告から) 例えば、「三角形」などは、中でも表記のゆれが激しい語で、その一例を挙げれば、A辞書では、「三角形」・「母音三角形」は、「サンカクケイ」とし、「直角三角形」・「二等辺三角形」は「サンカクケイ」としている。また、B辞書では、「三角形」以外は、すべて「……サンカクケイ」としている。ただし、この不統一は十分に意識してこのようにしてあるのか、それとも、それほど意識しないで、あるいは、見落としとしてこのような結果になっているのかははっきりしない。

以上のように、見出し語の表記を「現代かなづかい」によったという現行の市販の国語辞典でも、「旅客機」等の表記は、必ずしも統一されていない。また、内閣告示「現代かなづかい」の「細則第十二 牙の長音は、おうと書く。」の第三項「あふをおうと書くもの」の語例に、「おうりょくこう(鴨緑江)と掲げていることから類推して、「旅客機」を「りょかくき」と書き表すことは、決定的外れではないと思われる。しかし、この表記から、その発音は「リョカクキ」でなければいけないというのは行きすぎであって、ごく自然な発音では、前述の国語審議会が判断したように、「リョカッキ」というような、どちらかと言えば、促音化するものと認めてよいであろう。

もっとも、このように言っても、「リョカクキ」に近い発音を否定するものでもなく、「りょかき」という表記を否定するものでもない。

## 99年度 音訳（前期）講習会のご案内

盲人情報文化センターでは、音訳（前期）講習会を下記の内容で行います。  
この講習会では、初心者を対象に、発声、アクセント、腹式呼吸など音声訳に必要な基礎を勉強します。

実際に録音図書を製作するのに必要な講習会は2000年5月より「音訳（後期）講習会」を別途行う予定です。

この「音訳（前期）講習会」の受講を希望されます方は、申込用紙に必要事項を記入の上、盲人情報文化センター録音製作係までお送り下さい。

尚、定員の関係で試験をさせていただきます。試験日当日、来館出来ない方は、担当者までお申し出ください。

\*担当 盲人情報文化センター 録音製作係 清水

### 実施要項

- 実施時期** 1999年10月8日（金）～2000年3月24日（金）  
※毎月第2、第4金曜日 10回予定  
10:00～12:00
- 講習内容** 1. 発声の基礎  
2. 読み方練習
- 定員** 20名程度
- 申込方法** 申込用紙に記入の上、郵送またはご持参ください。  
社会福祉法人日本ライトハウス  
盲人情報文化センター録音製作係  
〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2  
電話 06-6441-0015
- 切日** 1999年9月10日（金）
- 試験日** 1999年9月17日（金）  
盲人情報文化センター 9階 10時～12時
- 試験内容** ①漢字の読み  
②アナウンステスト  
③面接  
※筆記用具持参のこと 鉛筆、消しゴム
- 発表** 10月1日までに連絡

### デイジー編集者募集

盲人情報文化センターでは録音のデジタル化にともない、デジタル編集ボランティアを募集します。パソコンを使って編集しますので、パソコンに慣れた方は歓迎します。講習はマンツーマンで行います。

デジタル編集を希望されます方は係までご連絡下さい。

定員： 若干名

切： なし（随時）

問い合わせ先 盲人情報文化センター 録音製作係 清水  
電話 06-6441-0015